

伝上杉謙信所用胴服八領 下 伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 四

著者	神谷 榮子
雑誌名	美術研究
号	244
ページ	31-41
発行年	1966-12-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00006642/



伝上杉謙信所用胴服八領下

——伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 四——

神 谷 榮 子

(6) 白地裏菊文綾、襟唐織胴服(図版V a・b・挿図22)

裏菊文が互の目に織り出されている白綾地の胴服で、襟は、紅と白の段地に立涌桐文の唐織である。この襟裂は襟の外側についており、内側には紅練緯の裏襟がついているので一覽表(報告四、上—美術研究二四二号)にも示したように、襟は襟首のところを内側に折って着装されたことがわかる。

裏は紅練緯の通し裏で、表の白綾地との対照が華やかである。襟裏の紅は黄味が強く、染めむらがあったりするが、裏裂の紅は褪色がほとんどなく、美しい色をとどめている。

紐は赤色の八ッ打の角紐で、鎧の総角などにある四角に角がある紐である。紐の太さは、四角の一边の幅が約〇・六センチで相当に太く、長さも総ともに四〇センチ近い(報告四、上の表—美術研究二四二号二頁参照)派手な胸紐である。この紐の赤色は紅染でなく、茜か何かであろう。^{註42}

襟裂の唐織は、(7)の襟と共に唐織の遺品資料としては、現在では最も

伝上杉謙信所用胴服八領 下

古いものである。この唐織はよく目がつんでおり(後述表襟裂の地合参照)、紅白段地に、立涌が地色の段と逆の組合わせ、即ち、紅地には白で、白地には紅で立涌が織り出され、それに桐文、沢瀉、及び一種の蔓唐草風の文様が配されている。この蔓唐草風の文様は、文様の本来の形は、室町・桃山期の桐の模様に見える枝や葉や触角のような形の蔓を伴った桐模様の一部、即ち胴服(3)の襟に見られた蔓のある桐の折枝(報告四、中—美術研究二四三号二四、二五頁)風なものであったのが、

この唐織の意匠構成の上で、空間を適宜埋めるために、五七の桐に附随していた葉や枝や蔓を分離させて配したものと推測される。天川神社蔵の格子桐竹文様片身替唐織^{註43}(挿図21 a・b)の桐文は、この胴服の襟裂の唐織の五七の桐文、葉、枝、蔓ともに形が酷似し、かつ、それらが一つの桐文様として構成されており、この推測を裏づける好資料である。

この襟裂の唐織に用いられている糸の色は、経糸は、白と赤の段(一段の幅が二七・五センチ)に緋風に締め切って染め分けた糸であり、緯糸は、橙色がかった紅(サモンピンク)と白、絵緯^{えぬき}は、^{註44}橙色がかった紅(サ

モンピンク)、橙色
 がかった薄紅^{註42}(薄
 いサモンピンク)、

白、鶯色、金茶、

薄浅葱、浅葱、萌

黄、濃い萌黄、紫

の十色である。こ

の十色のうち、薄

浅葱は非常に薄い

色、濃い萌黄は鉄

色に近い萌黄の濃

い色で、糸が朽損

して抜けていると

ころがある。紫は

灰色がかった褪せ

たような色で、よ

い色とはいい難い

が糸の傷みはみら

註43参照

b. 同部分

奈良 天川神社蔵

格子桐竹文様片身替唐織

挿図21 a.

れない。

この唐織全体の色彩は紅白が主調で、橙色を帯びた紅の濃淡は、柔和さを程よく整えるバランスのよい配置がしてあり、紅白以外の色では最も多く用いられている金茶は、暖かさ、柔かさ、豪華さを品よく処々に配している。白と白に近いような薄い浅葱は、この唐織に清々しさを与

えており、少量配されている鶯色と萌黄は暖色系のこの唐織に、適当に与えた引き締まり、アクセントの役を感じさせられる。

この色調は、先に述べた文様と相俟って、格調高く品位ある優雅な唐織を形成している。

この唐織の文様は、(2)(3)(4)(5)の胴服の襟裂と同様、襟首まわりの部分が襟の文様の起点になっている。背縫の延長線上が、襟裂の丁度真中の位置であり、そこにこの唐織の段替りの締切線が来ている。この襟裂の意匠である紅白段替り構成の起点と称すべき線であろう。その左右は、段の幅がこの胴服の襟肩アキの寸法(報告四、上の表——美術研究二四二号二頁参照)にほぼ合わせて、それぞれ七・五センチにしてあり、地色は左が白、右が赤となっている。襟裂としては、中央から襟肩アキの寸法を取った残りは、左右とも前身頃に廻る部分であり、従って起点の左右各七・五センチ幅の段(その締切線)より先は、それぞれ二七・五センチ幅の段替りになっている。

また、桐や沢瀉等の、向に上下のある文様は、起点の締切線を挟んで、五七の桐文の上方がつき合わせになって発し、それぞれ双方の先端に文様の下方を向けて伸びている。即ちこの襟裂の文様は、背面の首に当る部分は、桐文は二つが上方をつき合わせに横を向き、立涌も横向きにはなっているが、襟裂の大部分であり、かつ胴服として目立つ個所の前面の襟裂では、左右両側とも文様が下向になることを避け、すべて上向になるよう考慮されている。

以上のような段替り構成、文様の向から考えると、この唐織は予め襟裂用に意匠を企画して織られた織物であることが明らかである。胴服(8)

(小袖(2)と同一物、報告二——美術研究二二八号参照)や小袖(1)(報告二——美術研究二二八号参照)の襟裂と同様凝った織物である。能装束の唐織や打掛など、衣服全体が段替り意匠構成のもの、襟として織られた裂地をこの胸服の襟に用いたのか、或はこの胸服のために特別に織らせたものか、その点は不明である。

段の幅はすでに述べた通りで、立涌は、幅が、最も広い部分の外徑で十二センチ、長さが、立涌の最もつばまったところから次の最もつばまったところまで二十センチ、五七の桐文は、幅、長さ共に六・七センチになっている。

挿図22 胸服(6)の地文

このように見えてきても、この襟裂は現在のところ最古の唐織であり、唐織としてはごく初期の^{註45}ものでありながら、高度な技術と意匠に対する周到な配慮がうかがわれ、また、地質、文様、色彩、更に保存状態まで、これより後に出来た唐織の優品に優るとも劣らないことが知れる。

以上のような上質の唐織の襟が、胸服全体の白場に対する比率も効果

的に、適当に締めまりのある華やかさと品位を見せている。加えて紅裏との対照等、この胸服にもバランスのよい統一のとれた意匠効果がうかがわれ、(1)(2)(5)(3)の胸服と共に稀なる優品といえることができる。

(形状、法量、仕立て方)

形状、法量は一覽表(報告四、上——美術研究二四二号)の(6)。総重量七九〇グラムの綿の厚く入った胸服である。裏は通し裏、袖口、裾ともに施があり、施幅は袖口、裾とも約一センチ。袖口には留めがあり、左袖は袖山から二八・五センチ下った位置で、裏に一センチ入ったところ、右袖は袖山から二八センチ下った位置で裏へ〇・五センチ入ったところにそれぞれ白の絹糸で行われている。袖口綿は裏袖の袖口の施にふくませてあるがとじつけてない。裾の施は左右の棲先、背割れの左右の端ともに剣先風の仕立になっている。背縫の折被せは、表裏ともに正常(美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照)。袖附は表裏ともに平縫、折被せは表も裏の方が高く(上に)なっている。襟は、唐織の表襟と紅練緯の裏襟とがつき合わせになっている側は、縫代の分だけ端を二つ折りにした唐織の表襟に、綿をふくませた裏襟がくけつけてある。襟附は、表(唐織の襟がついている方)は平縫、裏はくけつけになっている。襟附は背縫線の上とか襟肩アキのところなど要所所で表裏のと同じ合わせ、即ち中とじが行われている。この仕立を見ると、表と裏とを別々に縫い合わせ(この胸服では裏襟は最後にくけつけた様子がうかがわれるので、裏裂の方は襟附縫は行われていない)ておいて、裾合わせをし、その後で綿を入れ、襟の中とじをし、襟下(立襟)をくけ、袖の表裏(袖口側のつき合わせになるところ)のくけつけをし、そして裏襟の襟附の部分及び表襟とのくけ合わせを行ったことが見当づけられる。

乳の位置は衽下りの位置から三〇・五センチ下ったところで、乳は約〇・八センチ幅、一・三センチ出ている。乳の裂は身頃の裏裂と同質と思われる。左右とも乳はわなが上、くけ目が下になっている。

縫糸は白の絹糸S撚が用いられており、針目は平縫の部分は約〇・七センチ、くけ縫の部分は一センチから一・二センチとなっている。縫目は少々粗い感じであるが、仕立全体は非常にきちんとしているよい仕立である。

(表 裂)

身頃

地合——地は経の六枚綾で／（右上り）、文はその裏組織で緯の六枚綾／（左上り）、経糸は一センチ間に六〇本前後、緯糸は一センチ間に三〇本前後。報告二（美術研究二二八号）の小袖の中、綾地九領の地合、胴服(3)の表裂の地合と同じである。

菊文の文様、大きさ——文様は挿図22、十六瓣の裏菊文で、一幅に五つが互の目に配列されている。長径は五・五センチ、短径は五・二センチ。

襟

唐織で、地合以外はさきに述べた。

地合——地は径の三枚綾で／（右上り）、経糸は一センチ間に七〇本前後、緯糸は一センチ間に三四本前後。地緯二本おきに絵緯が一本入っている（絵緯の撚はゆるいS撚）。目のつまったしっかりした地質の唐織である。

(裏 裂)

身頃

紅色の練緯で、地合は経糸は細く、一センチ間に四二本前後で、二本ずつ寄っており、緯糸は一センチ間に四〇本前後。^{註42}紅の後染。

襟

紅色の練緯で、地合は経糸は細く、一センチ間に四二本前後で二本ずつ寄っており、緯糸は一センチ間に四四本前後。紅の色に黄味が多い。^{註42}後染。

(7) 白地紗綾形雲文綸子、襟唐織胴服（図版VI a, b. 挿図24）

紗綾形と雲文が地文の白綸子地の胴服で、襟は萌黄地に、紅の濃淡、金茶、白等の絵緯で稻妻形の文様が織り出された唐織である。

この襟は、約二十一センチ幅の襟裂が二つ折りにしてつけられており、胴服の襟として、形の上では胴服(5)の襟と同類である。襟幅は九・五センチあるので、胴服(5)の襟のように外側に折って着装されたかと考えられた（図版VI a、及び一覧表——報告四、上、美術研究二四二号——参照）が、襟の外側が、全面平均して褪色しているので、胴服(1)のように襟は立てて着装した感じが強い。

裏は紅練緯の通し裏で、褪色は見られず、極めて鮮やかである。

表の裂地の綸子は、胴服(1)の表地を構成している裂地の一種、白地紗綾形地に蘭文様綸子（報告一、下——美術研究二一九号二八頁参照）と共に、現在のところ最も古い遺品である。綸子の遺品資料は、現在のところ、室町・桃山期のものはこれを除くと殆ど皆無で、まことに珍しい資料である。わが国では綸子は慶長年間に、明の製法に倣って織られたといわれるから、^{註46}この胴服が謙信のものだとすると、この綸子も胴服(1)の裂地の一種の綸子と共に中国からの舶載品ということになる。

襟裂の唐織は、胴服(6)の襟と同様、唐織の遺品では現在のところ最も古い。この唐織は絵緯が地を殆ど埋めつくすほど、裂の表に渡っているので刺繍と見紛うほどである。ただ二、三ヶ所絵緯の渡り方に狂いが生じている箇所（図版VI b、襟裂の中央、やや右寄りにもある）があるので、この裂は表側から見ただけでも唐織であることが判明出来る。この唐織

は胴服(6)の唐織よりは目が粗い(後述襟裂の地合参照)。

この襟裂の唐織に用いられている糸の色は、地は経糸、緯糸ともに同じ濃さの萌黄色で、絵緯は、多量に用いられている順に挙げると、薄紅^{註42}(ピンク)と橙色がかった紅^{註42}(濃いサモンピンク)。この色は、胴服(6)の濃いサ

モンピンクより色

が濃い。)は、共

に最も多く用い

られており、且

つ同量である筈

の文様構成にな

っている。次い

で金茶、濃い萌

黄、白、紫で、

計六色である。

この中、金茶と

濃い萌黄は胴服

(6)の唐織に用い

られている金

茶、及び濃い萌

黄と^{註47}同色で、紫

は胴服(6)の唐織

に用いられてい

る紫とも異り茶

挿図23 a. 紅白山道菊桐枝垂桜文様唐織 東京国立博物館蔵

b. 同 部分

色がかった色で、これもよい紫色とはいえない。しかしこの唐織の濃い萌黄糸には糸の朽損は見られない。紫糸にも糸の痛みはみられない。

この唐織全体の色調は、紅の濃淡が主調で、稲妻形に走る金茶、濃い萌黄、白、紫、地色の萌黄が鮮やかな効果の引き締め役を演じている。

特に白と金茶の用い方は電光さながらである。絵緯が大きく渡って、幅広い電光線状の文様になっているところは、紅か薄紅で、細い鋭い電光線文様はそのほかの四色の絵緯でできている。紅、薄紅、金茶はそれぞれ細い線を挟んで二本並列し、即ち、紅は白を、薄紅と金茶は濃い萌黄をと絵緯でできている細い線を挟んで二本同色が並ぶ構成をとり、紫は萌黄の地だけを間にして二本並び、白と濃い萌黄は一本ずつで、この唐織の線の組合わせは行われている。そしてそれらが、効果的に配分よく^{註48}整列し、あくまでも平行を保つジグザグ行進のような編成で、この稲妻文様を形作っている。

この文様の大きさは、ジグザグになっている線の最長の直線が九センチ、最短が一・八センチで、線の幅は、太い分は〇・七〜〇・八センチ、細い分は〇・一五〜〇・三センチとなっている。

東京国立博物館蔵の紅白山道菊桐枝垂桜文様唐織(挿図23 a b)は、この唐織の類似品である。紅白段の紅地の部分がそうで、山道文様(稲妻文様ともいえるであろう)が地文になって、桐文と菊文が互の目に織り出されている。その山道文様が似ているのであるが、この山道文様は、絵緯で地を殆ど埋めつくすようなことはなく、普通の唐織と同様、地が表面に相当量出ている。また山道文様の、縦に通る各ジグザグ線上において、恰も室町・桃山刺繍の糸遣いに見られる如く、絵緯の色をきっぱ

り替えている点が、この胴服の唐織と目立って異なるところである。

この胴服の唐織で特に注目され、驚嘆させられることは、殆ど地が見えないまでに絵緯が渡っていることと、稲妻文様の迫力ある構成である。唐織としては初期のものでありながら、胴服(6)の唐織と同様、後の唐織に劣らない高度な技術と意匠力の高さが認められる。

この上質の唐織の襟が、胴服全体の白場に対する比率も的確に、派手やかに品よく、鋭い締りを見せて胸元を飾っている。加えて紅裏との対照、裏裂と共裂の胸紐と、この胴服にもバランスの見事な統一のよい意匠効果がかがわれる。胴服(6)とは雰囲気を変えた、しかし同等の高さの優品である。

(形状、法量、仕立て方)

形状、法量は一覽表(報告四、上——美術研究二四二号)の(7)。上杉家伝来の胴服の中では(4)白地五重襷牡丹唐草文綾、襟繻胴服と殆ど同寸の身丈の短い胴服である。総重量六一〇グラムの綿入。裏と共裂の紅練緯平ぐけの紐にも綿が入っている(胴服(2)の紐の綿より幾分薄目に、胴服(4)の紐の綿よりは厚く入っている)。図版IVaでも見られるように左袖の前面下方に破損がある(幅二・五センチ、高さ三・五センチ)。裏は通し裏、紐も裏と同じ裂が用いてある。袖口には施があり、裾は施はなく突き合わせになっている。袖口の施は約〇・五センチ、袖口綿は施にふくませてあるが、その綿とはではない。袖口留はない。背縫の折被せは、表裏ともわれわれがいう正常な方向(美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照)になっている。袖附は表裏共に平縫、折被せは表裏共袖が高く(上に)なっている。襟附は、内側の襟附が平縫いで縫っており(針目が〇・六〜一センチ)、外側の襟附がくけつけてある(針目一〜一・三センチ)。この仕立をみると、表と裏とを別々に縫い合わせておいて、裾合わせをし、その後綿を入れ、襟下

(立襟)をくけ、

袖の表裏の袖口側のくけ合わせを行い、襟の内側の襟附を平縫で行い、襟を二つ折りにして、襟の外側の襟附をくけ縫いで行ったことがわかる。袖下縫の折被せに統一性が無い。左右とも衽下りの位置より二センチ下ったところに胸紐が直接挟み込んで縫いつけてある。左右とも衽が上、くけ目が下についている。

縫糸は比較的細い白のS撚の絹糸で、縫目は、平縫は、襟附の内側の針目を除いて、約〇・五センチぐらいに揃っており、くけ目は一〜一・二センチとなっている。

(表裂)

身頃

地合——地は経の五枚縹子、文は緯の浮織(裏組織が基準になっている)。経糸は一センチ間に八〇本前後、緯糸は一センチ間に三〇本前後。胴服(1)の表裂地の一種である前記白地紗綾形蘭文様綸子の地質^{註49}よりは経緯共に糸数は少ないが、経緯共に糸が太いので地は密で、上質の綸子である。

文様、大きさ——文様は挿図24、紗綾形の大きさは五センチ、雲文の大きさ

挿図24 胴服(7)の地文

は幅四・二センチ、長さ三・二センチ、中心部にある雲の塊の幅は二センチと、
胸服(1)の綸子よりは文様が長さで約倍大きい。^{註50}
襟

唐織で、地合以外はさきに述べた。

地合——地は経の三枚綾で／(右より)、経糸は一センチ間に六〇本前後、緯
糸は一センチ間に二八本前後。地緯二本おきに絵緯が一本入っている。絵緯の
撚はゆるいS撚。

(裏裂)

身頃、紐

身頃の裏と紐は同質の裂で、紅色の練緯。地合は経糸は細く、一センチ間に
四四本前後で、二本ずつ寄っており、緯糸は一センチ間に三六本前後。黄味が
強く、橙色がかった紅色で、^{註42}紅の後染。

(8) 薄茶濃茶片身替り竹に雀紋織綾小袖型胸服

この胸服については、伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告二、
伝上杉謙信所用小袖十二領(美術研究二二八号)で詳述したのでここで
ははぶく。

四 む す び

以上の調査によって、上杉家に伝わる八領の胸服には、次の諸事項が
結論として述べられる。

八領は、すべて疑う余地のない「うぶ」な胸服で、且つこの種の染織
品としては極めて保存状態のよい上杉家伝来の服飾類の中でも、特に良
好な状態で今日に遺されている。また八領共に、形態の上では、室町・

伝上杉謙信所用胸服八領 下

桃山時代の小袖に共通する特徴をよく備えており、胸服としての形が、
何れも、初期小袖の上にかさねて着たものであることを明らかに示して
いる。仕立も亦、室町・桃山時代の仕立の特徴である鷹揚さや技術の幼
稚さがあり、綿入仕立、袷仕立の方法において、すでに報告二(美術研
究二二八号)において述べた上杉家伝来の小袖との共通性が、各胸服に
おいて認められる。更に各胸服に用いられている表、裏、襟の裂地の種
類と、それらの染、織、繡、箔の技術と文様は、すべて室町・桃山期
の特徴が顕著である。加えて、室町・桃山時代の衣服の意匠の特徴である
対比対照の美も、各胸服とも、表裂の中においての見事な配分、胸服全
体に対する襟裂の効果、表裂と裏裂の対照等で遺憾なく発揮されている。
従って、これら八領の胸服は、明らかに室町・桃山時代の初期胸服で
ある。

ところで、上杉家のものとする検討からはどうかという小袖や帷子
の場合と同様なことが明らかになる。

即ち、意匠の上でも品質の上でも極上の優品揃いで、一貫して異常な
までの凝り方、贅沢、配慮が行われており、この点は、上杉家伝来の服
飾類の中でもこの胸服が特に著しいが、見たところでは、その凝りよう
や贅沢、配慮はそれほど目立たない。卓越した意匠力で、贅沢を充分に
駆使し、格調高い芸術作品としての胸服を種々作成した感が強い。これ
ら八領の胸服に用いられている裂地は、種類が多く、上質揃いであるこ
とで注目されるが、中でも唐織二種(6)(7)の襟裂、綸子二種(1)の表裂
の一種、(7)の表裂)は、現在のところ唐織、綸子の最古のものとして、得
難く貴重な資料である。

小袖や帷子の場合に、上杉家のものであるという決め手になった竹に雀の紋所が、胴服の場合は(5)浅葱綾竹雀紋繡、襟摺箔描絵胴服と(8)薄茶

濃茶片身替り

竹に雀紋織綾

小袖型胴服の

二領に見られ

るだけであ

る。しかし、

胴服相互の地

質、地合、染

色、文様(模

様)、刺繡技

a

c

b

挿図25 a. 伝直江兼統所用薄浅葱緞子胴服 山形 上杉神社蔵 b. 部分 c. 紐 註51参照

法、刺繡技術、形態、法量、仕立て方、意匠等、前述調査事項に基いて、同一点、類似点、関連性を辿って照合すれば、すでに調査ずみの小袖と比較するまでもなく、これら八領は、おのずから一連のもの、即ち室町・桃山期の上杉家の胴服であることが明白になる。

次に、これらは、すべて実用着の胴服で、所用者は寸法の上から一人と見做すことが出来、また小袖の寸法(報告二、表——美術研究二二八号、一七頁参照)との比較から、小袖の所用者と同一人と考えることも可能である。しかし、小袖や帷子の場合と同様、時代をあまり隔てない所用者の混入も考えられるが、上杉家の場合、小袖や帷子の報告においても述べたように、謙信以外の該当者は景勝(弘治元年—元和九年)一人と限定されるので、これら八領の胴服は、伝来通り謙信所用か、或は景勝所用のものも入っているかということになる。

ところで、ここに一領、同じく上杉家伝来の景勝の家臣、直江兼統(永禄三年—元和五年)所用と伝えられる胴服(挿図25 a. b. c)がある。写真

でもわかるように、この胴服の形は、謙信所用と伝えられる八領の胴服と比較すると、謙信所用の胴服には何れにも、小袖に近い要素が多く見られるのに対し、直江兼統の胴服は後世の羽織に近い諸要素が認められる。この直江兼統所用と伝えられる薄浅葱緞子胴服の形態は、白石・片倉家伝来の伝太閤拝領小紋胴服(報告三、挿図6——美術研究二二三号、八頁)、日光・東照宮所蔵の伝徳川家康所用小紋胴服(報告三、挿図7——美術研究二二三号、九頁)、京都・豊国神社所蔵の伝太閤所用紗綾胴服、京都・明石家所蔵の伝太閤拝領、桐紋散し矢襖模様辻ヶ花染胴服(挿図26)、徳川美術館所蔵の伝徳川家康所用紫地葵文散し辻ヶ花染胴服、上

野・東照宮

所蔵の伝徳

川家康所用

紫地葵紋、

桐紋散し辻

ヶ花染胸服

と同種で、

後世の羽織

と同様に、

衽はなく、

襟は前身頃

の裾まで附いており、襟に相当する裂の幅出しが行ってある(明石家の胸服には襟や裾に相当する裂の幅出しはない)。^{註52}

伝直江兼続所用の胸服以下列挙した胸服七領に、伝謙信所用の八領、

並びに静岡市宇都谷の石川家蔵伝太閤拝領紙衣胸服(報告四、中、挿図16

——美術研究二四三号二八頁参照)を加えた計十六領が、現在わかっている

初期胸服の殆どであるが、この中で、謙信所用と伝えられる胸服八領

と形態が同種であるのは、静岡市宇都谷の石川家の紙衣胸服一領だけで

ある。この紙衣の胸服は、天正十八年三月十九日に拝領という伝承もあり、

胸服の形態、模様の点から、謙信所用胸服に近似していることを照

合すると、謙信は天正六(1578)年に数え年四十九才で歿しているのので、

上杉家伝来の八領の胸服を謙信が壮年時から晩年にかけて所用したと見て、

時代はさほど隔らないことが推測される。これらを、初期胸服の更

挿図26 伝太閤拝領桐紋散し矢襖模様辻ヶ花染胸服
京都 明石家蔵

に初期のもの(初期胸服の中でも更に古様を有するもの)とすると、これらには共通して、次のような特徴が認められる。

即ち、総体に、小袖に近い感じ、小袖の形から脱皮しない感じがする。具体的に述べると、最も大きな特徴として、襟が小袖の襟と同様に、前身丈の途中までしかついておらず、前身頃には小袖同様立襟(襟下)がある。そして殆どのものには衽があり、襟がない。袖は平袖が大多数である。^{註53} また襟は装飾的な裂地がつくことが多く、胸紐は大きく派手なものが多い。

小袖の上にかさねて着る胸服が、ごく初期では、小袖の形に酷似していたであろうとは当然考えられることである。^{註54} そしてそれが、小袖の上にかさね、羽織って着るという用途上の着やすさや恰好の点で、順次改良され、やがて後世の羽織に発展、完成する過程はまことに必然的である。従って、多少の前後や過渡の様相はあれ、小袖に近い形の胸服は時代が上り、羽織に近い形の胸服は時代が下ることがいえるであろう。

以上のような観点から、上杉家に伝来する謙信所用と伝えられる胸服は、八領共に、初期胸服の中でも古様を備えたものであるから、時代は上り、伝来通り謙信所用と考察される。その中に景勝所用の胸服が混入しているとすれば、それは景勝の青年時代から壮年にかけてのものということになる。時代は室町末〜桃山初頭の推定になる。

なお、報告一において述べた(美術研究二一九号三〇頁)が、当時の胸服には洒落着としての面が多かったようで、中でも上杉家伝来のこの八領には、その傾向が顕著であることが特筆される。

加えて、上杉家伝来の胸服には紅染が豊富に使われており、紅は褪色

が著しいにもかかわらず、何れも殆ど褪色のない状態で今日に伝えられている。紅染の点に絞って考えただけでも、得難い資料である。

ともかく小袖に附随して研究される胸服で、現存遺品に乏しい初期のものが八領、それも古様を備えた、染織品としても最高の優品揃いが、裂地、文様の種類も豊富に、うぶな形で、しかも保存状態が至って良好に伝えられていたことは、染織工芸史、並びに日本服飾史上、意義の深い重要な資料の発見であったといわなければならない。

(一九六五年一〇月)

註

42 胸服(6)(7)の紅染

(6) 白地裏菊文綾、襟唐織胸服の紅染

表襟(唐織)の紅色

絵緯の濃い紅 10R 6/10

絵緯の薄紅 10R 7/8

裏襟の紅色 10R 6/10

裏裂の紅色 7.5R 5/12

表襟(唐織)の絵緯の濃い紅、薄紅、裏襟裂、裏裂の染色について

(2)の身頃の染色と同様、帯黄色の紅(緋)で、黄色の下染が施された上に紅染したか、或は紅花餅に含有する水溶性の黄色素を完全に溶出しないで紅染したかの何れかと考えられる。

紐(組紐——角八ッ打)

紅染ではない。茜か何かであろう。

(7) 白地紗綾形雲文綸子、襟唐織胸服の紅染襟(唐織)の紅色

襟(唐織)の紅色

絵緯の濃い紅 10R 6/10

絵緯の薄紅 10R 7/10

裏裂、紐の紅色 10R 5/12

襟(唐織)の絵緯の濃い紅、薄紅、裏裂の染色について

(2)の身頃の染色と同様、帯黄色の紅(緋)で、黄色の下染が施された上に紅染したか、或は紅花餅に含有する水溶性の黄色素を完全に溶出しないで紅染したかの何れかと考えられる。

以上の推定は褪色実験における色相変化と符合させて考えてみた。 鈴木孝男

(報告四、上——美術研究二四二号、四、五頁、報告四、中——美術研究二四三号、三四頁註31参照)

43 これは補修と仕立替えの跡が非常に多くて、原形は著しく失われている。この片身替りの桐竹文様の裂は、見たところ唐織のようであるが、この裂地は唐織ではなく、綾の地文通りに色糸で刺繍が施されたもので、唐織を倣したともいえる刺繍裂である。これと同様な手法が行われている裂地が、奈良の勝手神社蔵、格子葡萄文様片身替縫箔にも用いてある。

44 多少手のこんだ紋織物では、地を織出す緯糸のほかに、文様(絵模様)を現わすための緯糸が用いられる。地を織り出す緯糸を地緯、文様を織り出す緯糸を絵緯という。簡単な紋織物では、地緯又は地経だけで文様をあらわし、絵緯は使わない。

45 唐織は、堺に、天正年間、明様の錦(その他に金襴、紗、紋紗、金紋紗、緞子、縮緬)の織法が伝来し、製織されたのが始めて、その後慶長前後に、西陣の俵屋某が、明様の錦にわが国中世以来の浮織の技術を加えて唐織を製織した(以後能装束に効果的に用いられる)といわれている。——佐々木信三郎著「西陣史」七六頁(和泉志、雍州府誌卷七に基く)による。

46 佐々木信三郎著「西陣史」九二頁(工芸志料より)

47 胸服(6)(7)の唐織を比較して同色であることを確認した。

48 図版VI bの向って左上方、左端の白の絵緯(中央で切断された入子菱形の真中に見られる)から、〇の傾斜で向って右下方に順次絵緯の色を追うと、白、紫、紫、紅、白、紅、金茶、濃い萌黄、金茶、薄紅、濃い萌黄、薄紅、白(図版VI bで見られる絵緯の狂いの個所よりやや右上の白い点)となっている。

49 白地紗綾形蘭文様綸子は経糸は一センチ間に九〇本前後、緯糸は一センチ間に三四本前後、糸が細いので地質は多少粗い感じである。

50 胸服(1)の綸子の紗綾形の大きさは二・二センチ。

51 挿図25 bに見られるような文様の薄浅葱緞子が表裂の胴服で、裏は金茶色平絹(練緯)、衿仕立である。衿はなく、襟は後世の羽織同様前身頃の裾までついている。襟

は、表は襟の幅だけ裾拡がりに裂が幅広く裁つてあり、裏は前後とも襟裂が接いである。肩山より三五センチ下った位置に濃い紫の胸紐——挿図25 c——がじかに挟み込んで縫いつけてあった(この紐の朽損が著しかったので、はずして別に保存した。長さは尖端の球も入れて一六センチ、元が太く先ほど細くなっている——元の最も幅広いところが二・五センチ、先の最も細いところが〇・七センチ——平織風な紐で、紐の中央に金茶色濃淡四本どりの飾り糸が通してあり、尖端の球には撚り金糸三本どりの飾り糸が纏にかかっている)。丈は後が九一センチ(背縫の位置で。繰越しが三センチあるので肩山からの後丈は九四センチ)、前が九九センチ(この中、前下り五センチ)。衿は六一センチ。後身幅は肩と袖下の位置で三九センチ、裾で四五センチ。前身幅は肩で三一センチ、袖下の位置で三六・五センチ、裾で四五センチ。袖幅は二二センチ、袖丈五二センチ。袖口二五センチ。襟幅一三・五センチ。重量は紐共615g(紐は15g)。背縫は四つ縫がしてあり、袖附は三つ縫で、裏袖がくけつけてある。

52 註51参照。後世の羽織に近い形の胴服で、この伝直江兼続所用胴服のような緞子とか、日光・東照宮、白石・片倉家の小紋胴服のような幅広い裂で仕立ててある胴服は、襟裂は別に接いでつけることはなく、その幅広い裂から、襟の分だけ脇の方に出して——脇の方は裾拡がりに三角形に出る。挿図25、報告三の挿図6、7参照——裁断してある。

53 小袖の上に羽織る衣服の胴服が、小袖と殆ど同じ形である場合は、着たり脱いだりするのに、袖は平袖の方が楽であるから、古様を備えた——小袖の形に酷似した——胴服というのは袖は平袖が多かったのだと思われる。

54 わが国独自の衣服の特徴に、平安朝以来の襲ね着があり、それは、形、仕立ともに大まかな、同じ形、乃至は同系の衣服を、時に応じ、枚数を加減して襲ねる衣服の着方である。応仁の乱以後、わが国の衣服の主流は小袖になるが、室町時代以降、小袖が襲ね着されていたことは、絵巻物、肖像画、風俗画、遺品資料等を通して明らかである。従って最上層の胴服が、羽織ったり脱いだりの着やすさの点などで、次第に形が改良されて行ったことは当然で、元の形はといえば、最上層の小袖で、初期胴服の中でも、時代が上るものほど小袖に近い形であつたろうことが推測されるのである。